

自然共生河川研究所(岐阜分室)だより

岐阜分室 前研究第三部 次長 梅谷内 信夫

河川法が改正され環境も目的に加え河川整備が進められることになりました。行政側においては景観や親水に配慮した川づくりは以前から実施されていますが、最近では多自然型川づくりということで自然の素材を使った川づくり、或いはコンクリートの見えない川づくりを進めていこうとしています。しかし、実際には依然としてコンクリートを使った整備が進んでいますし、少し進んで練玉石張の域をそれほど脱したとは思えない状況であり、国民の目から見ると必ずしも望ましい方向に進んでいるとは理解されていないのが実態です。これからの川づくりはこれら多自然型川づくりと相まって、それぞれの川が持っている特性と、川を仲立ちにして形成された個々の風土を踏まえてそれぞれの川が持っている川らしさをどのように引出し、それを醸成していくかが大切と考えています。

その時に地域住民がイメージするのはどのような川なのかを考えた場合、子供の頃に遊んだ小川や川原の風景が原点(原風景)にあるのではと思います。

これからの川づくりは地域住民の声を聞きながら住民と一体となって進める必要がありますが、その時の住民の声のベースとなるのは子供の頃の原風景ではないかと考えます。

しかしその原風景はどちらかと言えば甘い感情に左右されるものが多く見受けられます。

これからの川づくりは、お互いの考えをすり合わせていくことが大切であり、そのためお互いが持っている原風景を客観的にとらえる何かが必要でないかと考えています。

今回、自然共生河川研究所ではその一つとして長良川における昭和30年代の河川景観と現在の景観とを同一場所から撮って比較した写真集を作成しました。

写真は揖斐川との合流点付近から最上流の高鷲村宮ヶ瀬橋付近までのものであり、一応長良川本川については網羅されています。

この写真集で使いました古い写真は、中部学院大学短期大学部副学長和田吉弘先生が昭和30年代に「長良川の生物」を出版した際に流域全体の写真を撮られたものをお借りし、且つ岐阜県博物館の松田千晴先生に昭和初期の長良川の様

子を撮った写真をお借りし、それぞれの写真と同一場所から最近の様子を撮ったものと比較できるように整理しました。これらの写真から見えてくるものは人それぞれに違うと思いますが概略次のようなことが言えるかと思えます。

昭和30年代は土砂の流出が多いため河道内の植生は現在より少ない

低水路部(常時水が流れているところ)の河床が低下し高水敷と高低差が相対的に大きくなっている

堤脚沿を流れていた低水路部が高水敷造成等によって中央付近に移動し、堤防の安全性が相対的に向上した

河川内における民地の耕作や、桑園或いは河原を利用した乾燥などの行為がほとんどなくなり自動車の駐車場の利用が増えている

また、この写真集のことが岐阜新聞に掲載されたことから、この地域の学校の先生、写真家、生態調査に携わっている人、水防団等幅広い方々から問合せがありマスコミの影響の大きさに驚いています。このような写真集がこれからの川づくりを進めていくに際して、地元の方々との話し合いの場のツールの一つとして少しでも寄与出来れば望外の喜びです。

